

風 水 譚

第 4 号
(その 1)



蒙談会発行

連歌師宗祇の詠んだ築山館の池はあったのか？

八^は田^た ひろいち

今年の八月末に大内氏の館跡池泉庭園が復元された。池の水が往古の栄華を偲ばせている。

この北側に大内教弘が造営した築山館があつたとされている。前号で少し触れたが、今の八坂神社、築山神社の地に豪壮な庭と池があつたと伝えられている。大内教弘に招かれた連歌師宗祇は「池は海　こずゑは夏のみ山かな」と詠んだ。満々と水をたたえた海のような池や深山を思わず庭園であつたという。山口市教育委員会の数次にわたる発掘

調査では一時、池の汀線が現れたとされたが、後に池の存在は否定されている。山口市教育委員会「大内氏館跡12」によると

『築山跡』

大内氏の別邸とされる築山跡での発掘調査は昭和五十二（一九七七）年に開始され、現在までに十一次にわたる発掘調査が実施されている。

これまでに築地跡や堀状遺構・方形石組・土師器皿一括廃棄土抗・瓦溜土抗・溝状遺



築山連歌師宗祇の発句石碑



築山跡に建つ八坂神社

構・建物跡などが発見された。なお、連歌師の宗祇が築山館の池泉庭園を前に「池は海こずゑは夏の深山かな」と詠んだとされ、広大な池泉庭園の存在が想定されている。

「大内家故実類書」によると、江戸時代後期までは池の痕跡がのこっていたらしいが、その後に埋め立てられたという。

しかしながら、現在のところ、築山跡での発掘調査や地下探査では庭園跡は確認されていない。』と報告している。

しかし、近藤清石著「山口名勝舊蹟圖誌巻一」に次の記載がある。

『築山館趾

八坂^{マサ}築山両社の境外附属地をかけて是なり。もと氷上山興隆寺領なりき。多賀社 故大宮司 高橋^{すげがみ}右文がかけるものに。築山は四

方竹藪にて有しを天明二三年の頃氷上山恵海蔵僧正が代なりしが。切り拂はせ。其竹藪の土を似て池の形の残れる所を埋めて。畠とせり。その以前は五月雨の頃には水たゞへて。池のさま見えたり。



八坂神社、築山神社の広場
池のあったあたりか

さらに宗祇の発句にいう池についても

「この池の水は。これも右文がかけるもの。に。魚切より天華へうけて。上堅小路光台寺の後より。築山へ通ずる溝ある由 古人の云ひ伝あるに。今に畠の土底に水道ありと。

土を取るとて樋を堀出せる者のかたれる由をいひ。

さて築山の北の隅より。西の方の泉水へ引き。それより屋形の堀へとり。堀よりすする水を飯田町に流せる由の伝にて。

今に飯田町筋を堀る時は。樋出づ。と云へり』文中の「魚切」とは天花の上流で一の坂ダムの東岸の下あたりの小字名である、急流、激流のため魚が登れない処をいう。県内にも数カ所「魚切」の地名がある。島根にも「段魚溪」があったのを思い出した。高橋、近藤



近藤記述水路推定図（昭文社地図 昭26）に加筆



「魚切」のあたり水没地集落
一の坂ダム建設事業資料集より



ダム着工前全景（S54.7）
魚切の手前下流より上流を望む

氏や土地の人の話が真実なら面白い。館の池に水を枯らさない様に一の坂の上流に取水口を設けたとしても川の水の多少に影響されないために溜枥を作り、さらに天花の枥で受水して、ついで樋（木か土か石管？）に水を流して大内館の北側から館の西側の池泉にみちびいたと考えられる。私は六年位前から池の水源と水路がある筈と館趾まわりを歩いてみた。一ノ坂川の扇状地の小高い中央部に館があつて後河原や自衛隊西側の川からは逆傾斜のため水は導けない。木町の橋のあたりから上豎小路を通つて築山へ導水できそうである。しかし、近藤記述にはこのルートはない。大内時代木町は伐木集積地であり、人通りも多く取水地としては不適だったかも知れない。

近藤説に従うと八坂神社社殿の北の石鳥



天花一丁目4の御幸小路
水道のルートあたりか
光台寺裏へ



八坂神社の北側の石鳥居
天花方面

居あたりから御幸小路を北へ登ると光台寺の後に達する。雲谷庵の前の小路は扇央部よりやゝ低地のため水は館へ引きにくそうである。天花から魚切りへは取水の仕掛け工事はどうであつたか不明であるが、山口から九州、さらには大阪、京都と版図を拡げた大内氏にとっては各地の池の水利工事も知悉しており、優秀な技術集団が多数いたと思う。迎賓館げいひんをかねた築山の池への取水と排水は、格別に高度な工夫をこらしてあつたと思われる。右文宮司すけのみの伝えが本当ならば精緻な工学技術によるこらした大土木工事と驚きに堪えない。光台寺裏や飯田町から樋が出たというが、現代の発掘によって再発見されたら大知見だと、と大内文化のロマンは大きく広がる。

文献史料と考古学調査が合致すると山口



飯田町筋、豎小路より後河原へ
現在でも両側に排水路がある
右が山口ふるさと伝承館



一坂ダム左岸より築山館を望む谷間を
一の坂川が流れて下る



**復元された池泉庭園と桧皮堀きの龍福寺本堂
(元氷上山興隆寺釈迦堂)**

の大内文化の実像は更に明らかになると思われる。

大内氏館跡の調査でも、大内弘世造営の館説は一度は否定され後世の遺物しか出なかったが、しかし、その後の新しい調査方法によって発掘遺物は弘世時代にまで遡ることが判明した由である。

大内氏館の復元された池の水源と取水経路もほぼ同じルートと考えられ、この水利工事がのちに築山館の池にも利用されたのではなかろうか。

築山に宗祇の詠んだ池はあったと考えたいが、現時

点ではその池は築山でなく大殿の復元された池泉とされている。しかし、大学者の近藤清石先生が伝承として誌されていることは根も葉もない話ではないだろう。更なる発掘調査で裏づけられて築山後に池が再現されれば、大内文化を偲ぶ山口の史蹟として夢のある一大名勝となるだろう。

(最後に本論作成にあたっては白石征洋氏と中山智裕氏のお世話になった。厚く御礼を申し上げます)

参考文献

- 「大内氏築山跡Ⅰ～Ⅴ」 山口市教育委員会
- 「大内氏館跡十二」 二〇一一年 山口市教育委員会
- 「山口名勝旧蹟図誌巻一」 近藤清石 著 博古堂
- 「一の坂ダム建設事業資料集」 山口県
- 「山口市地図」 (株) 昭文社 昭和二十六年版

伊藤博文公供養顕彰塔建立と先祖墓碑改修について

―伊藤公没後百年記念事業―

柴 田 眼 治

平成十三年三月二十一日に萩市津守町の浄土宗報恩寺で伊藤博文公が改葬された養祖父母とそのお子さん達の荒廢した合葬墓が確認され、博文公自身のお位牌も発見された。このことは、平成十三年六月六日蒙談会発行の「蒙談第三十二号」に筆者が報告したところである。直ちに野村興兒萩市長に連絡したところ、関係部署の担当者と共に現地に來られ、ご住職や昔のことに詳しいご母堂と會われて、このお墓やお位牌の経緯を聞かれた。何とか修復したいものだとして再建の方策に

つき数度にわたり協議を重ねた。市長さんは伊藤家のご当主博雅氏と会われたり、私も電話やFAXで連絡をとった。平成二十一年は伊藤博文公没後百年にあたり、この年の記念行事として前年から修復事業が一気に具体化して、三ヶ月前から改修工事に着工し、九月初旬に作業が完了した。施工は市内の伊勢島工務店であった。次に筆者が防長俱樂部に寄稿し掲載された一文に加筆して報告する。



博文が改葬した伊藤家先祖の墓
周囲の玉垣は失われ墓碑も前傾している



報恩寺 萩市内

『◎はじめに』

平成二十一年は、憲法導入や国会開設に主導的な役割を果たし日本の近代化に大きく貢献した初代内閣総理大臣伊藤博文公の没後百年にあたり、山口県内各市では様々な記念行事を展開してきた。

萩市では、今般、老朽化し痛みが目立つなどかねてから懸案となっていた市内報恩寺境内の伊藤博文公建立の伊藤家先祖の墓碑を、同寺総代会や萩商工会議所会頭、萩市文化財保護協会会長などの賛意・ご尽力とワンコイントラスト委員会の盡力により、記念事業の一環として修復し、伊藤公建立時の明治三十二年の姿を取り戻した。あわせて公の供養と顕彰のために一石五輪塔が建立された。

◎伊藤博文公先祖の墓碑について

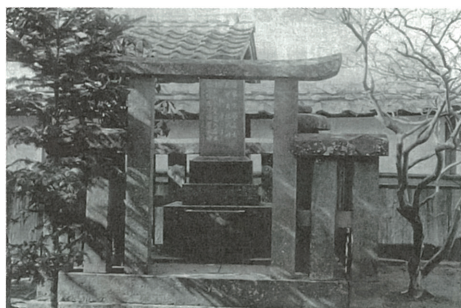
報恩寺の過去帳及びご住職の話によると、この墓は、博文公の父林十蔵を養子とした伊藤（水井）直右衛門夫婦とその子供たちの墓である。直右衛門夫婦の三人の子供は、夭折しており、そのため直右衛門は十蔵を養子とした。この墓碑は本堂に向かって左に立つ。基壇上に石灯籠・花台を置く。台座三重。墓石正面を二段に彫りくぼめて、上部に伊藤家紋（上がり藤）、向かって左側面に「侯爵伊藤博文改葬」、右側面に「明治三十二年十一月」と刻んであり、博文公の自筆である。本来この墓は報恩寺墓地の中にあり、ごく小さなものであったが、明治三十二年（一八九九年）に博文公が帰萩した際、わざわざ本堂前の目立つ位置に改葬したという。

直右衛門の妻（もと）は伊藤公の養祖母に

あたり、博文公はこの祖母に厳しく躰けられたが、可愛がられたため非常に慕っていたという。祖母は明治元年（一八六八年）に死去しており、その三十三回忌にあたり公の手により改葬された。公にとっては父十蔵が伊藤家養子に入ったことにより軽輩ながら士分となり、後に来原良蔵（桂小五郎の妹婿）の引きたてで松陰門下生になった機会を得たありがたい先祖であった。

また、墓碑に向かって右のサルスベリの木は伊藤公が改葬時にお手植えしたといわれており、巨樹となつて現存している。公は明治三十二年六月第三次伊藤内閣解散後に萩を訪れ「王政復古と憲法政治」の演説をした。その翌日にも養父母の墓参をしており、この時に墓石の改葬建立を最終的に指示し、十一月に完成したと思われる。』

◎伊藤博文公の位牌
 伊藤博文公が生前、当寺の住職と相談して決めておられた伊藤公自身の戒名は、素木の位牌の表面に「文忠院殿博譽古林春畝大居士」、裏面に「明治四十二年十月二十六日」と墨書してある。ハルピンで死後直ちに作成されたもので、寺内に安置してあった。そこ



創建当時の伊藤家塋墓（毛利家所蔵写真）
 笠山の石が使われていた



墓碑再建打合せ

右から、難波住職、野村市長、筆者、刀襦会頭



東京品川区西大井から送られた伊藤公墓所の瓦「家紋上り藤」



再建事業委員会の打合せ風景

で今回、公の戒名を刻んだ五輪塔形の石碑を設置した。さらに東京西大井の伊藤公墓所の家紋入りの軒瓦二枚を財団法人防長俱樂部のご高配により特別に送って頂いた。難波俊明住職が本尊の寺の阿弥陀仏名を墨書され、有志が謹写した一字一石写経石も墓壇底部に鎮められた。この五輪塔は伊藤博文公の供養と偉業の顕彰のために今回、新造されたのである。



伊藤博文公の素木位牌
「文忠院殿博譽古林春敏大居士」
没後急造されたと伝わる



老朽荒廃墓碑解体工事開始伊勢島修工務店
右のサルスベリは伊藤公お手植え



墓石基壇下の土中から伊藤家一族の自然石
墓が多数出土した

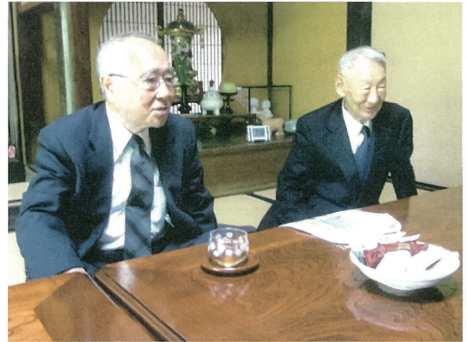
◎萩市報恩寺除幕披露式典

平成二十一年九月十三日（日）は快晴だった。午前十時から伊藤家先祖墓碑修復、博文公顕彰養塔の建立開眼法要とお披露目式が挙行され、萩市内外から約六十名が参列した。公から四代目当主の伊藤博雅氏と孫の伊藤和雄氏が特別参詣された。私達の山口市からも約二十名が参列した。

その次第は、最初に記念事業実行委員会を代表して萩市長野村興児会長が挨拶、ついで萩市商工会議所会頭の刀祢勇会長が経緯を発表された。筆者は墓碑、位牌の八年前の発見について説明させて頂いた。除幕披露、続いてご住職による開眼の読経の後、ご当主によって灯籠に百年ぶりに灯明が点された。伊藤家を代表して伊藤博雅氏が謝辞を述べられた。最後に参列者一同は焼香回向した。



萩野村興児市長よりお披露目式の挨拶



報恩寺客殿で寛がれる、左は伊藤博雅氏、右は伊藤和男氏



伊藤博文公供養と顕彰の石五輪塔位牌の戒名を拡大して前面に彫りこんである「文忠院殿博譽古林春敏大居士」



ご当主伊藤博雅氏から御礼の挨拶



再建改修が完了し除幕式をまつ



博雅ご当主による灯籠の灯入れ式



伊藤家墓碑と博文公顕彰供養塔の開眼式
難波俊明ご住職



焼香の人々
右は博文公のお手植えのサルスベリ



参列の皆さん



菊ヶ浜での昼食（日本海と右手に笠山、
左は指月城跡、右後方に女台場）



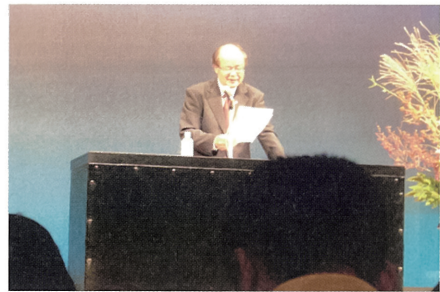
萩市内や山口市からの参列の方々と
伊藤之雄教授

再建事業を通して博文公のご先祖に対する孝養心の深さを知ることが出来た。さらにまた、幕末維新を駆け抜けて日本の近代国家建設に偉大な功績を残された伊藤博文公の供養と顕彰塔が完成したことは誠に有意義な後世に残る事業だったと感銘を覚えた。

式典後、萩市博物館で開催中の「伊藤博文とその時代」を山口から参加の二十名の方々と見学した。日本の近代化を分かり易い諸資料で陳列されていた。伊藤博文、最後の揮毫（明治四十二年十月二十日旅順港で日露戦争の感慨を詠んだ漢詩）や、ハルピンへの列車の中で漢詩の草稿は亡くなる六日前の最後の絶筆であって貴重で珍しかった。見学後一同は菊ヶ浜に移動して砂浜の松林にすわって博文や長州藩士が望んだ日本海をみな

がら折詰弁当で昼食をとった。当時、海の彼方に異国の黒船の幻影をみて攘夷に燃え、女台場も築かれたのだった。今回のバスや昼食など萩市政策局企画課の中村係長のお手配がありがたかった。

市民会館で午後一時半から「没後一〇〇年記念シンポジウム」を満員の人々と共に聴いた。基調講演は伊藤之雄京都大学教授の「伊藤博文と明治天皇―日本のかたちを作る―」だった。先生は博文の一次資料を丹念に読まれ従来の博文像の誤りを指摘された。愛犬に俊輔と名付ける程の伊藤好きで、博文研究の第一人者である。明治天皇に信頼され最も愛された博文公は日本の近代化に偉大な足跡を残したと述べられた。



基調講演「伊藤博文と明治天皇」
―日本のかたちをつくる―
伊藤之雄京大教授



パネルディスカッション
「伊藤博文の虚構と実像」―没後100年の真実―
松本、瀧井、宮地の各氏

◎基調講演の要旨

伊藤の実像 木戸孝充は岩倉具視に伊藤の人柄は「剛凌強直」即ち「強く厳しく正直」だと云っている。

楽天的で明るく人との交流が得意。長期的な理想と展望を持ち、物事の困難さがわかり、現実的に処理できる。西欧体験による物おじしない人柄で英語力があつた。日本や西欧へ

の深い洞察ができた。

家庭 梅子夫人や貞奴など女性からの評価が高かった。

明治天皇は伊藤のみは信頼できるといった。伊藤は明治天皇に憲法を学ばせた。大日本帝国憲法を制定し、その運用として帝国議會を開設して、「日本の骨格」を形作った。朝鮮併合には最後まで反対だった。などを話された。

パネルディスカッションは「伊藤博文の虚構と実像」没後一〇〇年の真実」で伊藤教授がコーディネーターをされ、松本健一氏（麗澤大学教授、作家、評論家）、瀧井一博氏（国際文化研究センター准教授）、宮地ゆう氏（朝日新聞社社会部記者）の皆さんでアジアの中の日本、長州ファイブの一員としての博文、明治立憲体制での実際の政治運用と

憲法制定や国際関係について話された。幕末維新から明治にかけて何度も洋行して欧米の情勢を最もよく知る唯一の日本人であった。松下村塾に学び、萩で志を立てた伊藤博文公は日本の近代化の礎を築き上げ、初代内閣総理大臣となった。東洋と西洋に開国した日本を世界が認める立憲国家の基礎と骨格を樹立したのだった。

講演後、山口からの参加者は萩市のご好意によりお手配のバスで帰山した。車中、参加した方々の感想発表で大いに盛り上がった。伊藤博文公につき、その全容を知ることができた極めて有意義な萩の一日だった。県内では光市、萩市、山口市、下関市で没後百年の企画展が開催され、私は萩以外にも山口市と光市展へ参加し、山口が生んだ偉人の足跡を学んで伊藤博文公の生涯を偲んだ。

◎後日譚

伊藤博文公のお位牌は神奈川県大磯にもあった！

萩での記念式典のあと伊藤博雅氏や伊藤和男氏からお礼状を頂いた。鎌倉にお住まいの博雅ご当主からは「滄浪閣の時代―伊藤博文没後一〇〇年記念事業展―二〇〇九年十月二十四日大磯町郷土資料館発刊」を同封して送って頂いた。

伊藤公は小田原から大磯へ移築した滄浪閣に明治二十九年（一八九六）からハルピンへ旅立ち亡くなった明治四十二年（一九〇九）まで梅子夫人と暮らしておられた。

内容を読んでいると伊藤公のお位牌が大磯町内北本の大運寺に祀られている記事と写真があるのを見つけた。すぐに資料館へ電



左より筆者、お位牌、石垣一彦ご住職



浄土宗大運寺 神奈川県大磯北本

話して佐川和裕学芸員にお話を聞いた。ついでに浄土宗大運寺に電話してお位牌安置のいきさつを伺って、大体経緯がのみ込めた。

翌年になって茅ヶ崎の岳父に会いに行くこととなり平成二十二年三月六日に家内と二人で大磯を訪ねた。JR大磯駅前の観光案内所で聞くと大運寺は近くだった。連絡しておいたのでお寺に着くと石垣一彦住職が迎えて下さった。本堂に上がるとご本尊の前の台上にすでに博文公のお位牌が安置してあった。戒名は「文忠院殿博誉古林春畝大居士」と彫られた黒漆塗り金箔製の立派なお位牌であった。萩市報恩寺の伊藤公のお位牌の戒名と同じだった。

伊藤公は没後国葬され明治四十二年（一九〇九）十一月四日東京日比谷公園を葬儀式場として厳粛に執り行われた。朝野から多数の

人々が参列し沿道には人々が列をなして涙ながらに柩車を見送った。夕刻品川区西大井の地に到着した。神式の円墳様式で埋葬された。墓地には現在、梅子夫人と対をなしてお墓が並んでいる。その中間に御霊舎が建っている。防長倶楽部が管理してご命日には関係者が参列して、神道式で墓前祭が続けられている。

さて、大磯では没後一ヶ月目にこのお位牌を謹製し、町民葬とした。芝増上寺の堀尾大僧正を大導師として盛大な追悼会が行われた。この追悼会は十周忌、三十周忌と続けられた。博文公は大磯に滄浪閣を建ててから、大磯町民となり税金も払って町長に何かあれば遠慮なく云ってほしいと伝えた。小学校には奨学金を寄付したり、基金つきの積立貯金の通帳をつくって一人ずつ渡したりした。



滄浪閣舊蹟の記念碑



位牌が出来た経緯が当時の大運寺ご住職により記述されていた



家紋の入った立派なお位牌

また、漁師達を邸内によんで相撲をとらせて声援するのが大好きだった。町内を散歩しては農家や漁師の人々と気楽に談笑していたりして町民に大変人気があった。

「てえしよ（大将）」と呼んで人々は総理大臣に親近感をもち、誇りにしたという。

さて、大磯大運寺と萩報恩寺の公のお位牌であるが、ハルピンで亡くなられて、萩で急造された。素木でつくられた仮の位牌である。難波住職の話では院殿号は当時の住職がつけられたという。大居士名は博文公のお考えが込められていたそう。誉れは博く、古い林家（熊毛郡東荷村の林家出身でその祖先は河野氏でその先は越智命と伝える）から出た春畝（幼名俊輔を高杉晋作は『しゅんぽ』と音読みして春畝の号をつけた。）居士といった意味になろうか。「文忠」は公の死後二日

目到大韓帝国皇帝が「文忠」の諡号を贈っており、そのニュースが報恩寺へ伝わり素木位牌がご住職によってつくられ、最終的に戒名が決まったのではなからうか。一方この戒名の方は大磯滄浪閣の梅子夫人や親族の方へ急報されたに違いない。

大磯町民追悼会に際して本式のお位牌が調製された大運寺も萩報恩寺と同じ浄土宗であるので戒名は梅子夫人か一族の方から告知されたと思われる。芝増上寺は徳川家によって関東の浄土宗本山となっている。一大政治家の追福菩提のために大僧正が本山から出向されたのであろう。大運寺のお位牌の裏には黒漆地に朱で、この経緯が書かれていた。ご住職に色々、伺い伊藤公のお位牌に心を込めて焼香と礼拝をして大運寺を辞した。滄浪閣跡の記念碑を見て博文公がよく散

歩した浜辺を歩いた。公はこの黒い砂利の上を歩きながら、うちよせる波や、遠く広がる太平洋を眺めて若き日の欧米での勉強や視察に思いを馳せていた事だろう。又、多難な国事の解決策や進路について思索にふけておられたと思った。萩の日本海や大磯の太平洋の浜辺に佇むと日本の近代国家を創った伊藤博文公の面影が去来するのであった。



伊藤公が散策したり地浅き網に興じた
大磯ロングビーチ

伊藤博文 略年譜

年号	西暦	年齢	事項
天保十二	一八四一	一	九月二日（山口県）熊毛郡東荷村に生まれる。 幼名は利助
弘化三	一八四六	六	父十蔵が仕事を求めて萩へ出る。母琴子とともに母の実家秋山家にあずかれる。 萩に移住する
嘉永二	一八四九	九	東荷村の生家が暴風雨のため倒壊する
安政元	一八五〇	一〇	伊藤姓を名乗る
安政三	一八五四	一四	長州藩の相州浦賀（現在の神奈川県）警備に出役する
安政四	一八五五	一六	作事吟味役来原良蔵の配下となる
安政五	一八五六	一七	松下村塾に入り吉田松陰に学ぶ
安政六	一八五七	一八	密用役中村道太郎に随行し、山県小助（有朋）らと京都を情勢視察する
安政七	一八五八	一九	来原良蔵に随行し長崎で洋式兵術を学ぶ
安政八	一八五九	二〇	桂小五郎（木戸孝允）とともに江戸へ行く
安政九	一八六〇	二一	吉田松陰が刑死し、吉田の遺骸を小塚原回向院に埋葬する
安政十	一八六一	二二	このころより俊輔を名乗る
安政十一	一八六二	二三	高杉晋作ら一二人と品川御殿山イギリス公使館焼き討ちに参加

年号	西暦	年齢	事項
文久三	一八六三	二三	士分にとりたてられる。長州藩士入江九一の妹すみと結婚する
元治元	一八六四	二四	井上馨らと英国へ留学 外国艦隊との応接を仰せ付けられ、講和につくす
慶応元	一八六五	二五	高杉晋作らとともに挙兵、藩論を倒幕に統一 束荷村の秋山家に立ち寄り一泊する（最後の帰郷） 武器購入のため長崎に入る
慶応二	一八六六	二六	すみと離婚 梅子と結婚する 軍艦購入のため長崎に入る 長女貞子誕生
明治元	一八六九	二九	情報収集のため長崎に入る。その後、下関で坂本龍馬らと会見する 外国事務掛として神戸にて米・英等6力国公使と会見し国書を手渡す 兵庫県知事となる このころより博文を名乗る 大蔵少輔となり後に民部少輔を兼務する。陸奥宗光らと廢藩置県の意見書を提出する。
明治二	一八七〇	三〇	財政制度調査のためアメリカへ出張する
明治三	一八七一	三一	アメリカから帰国する
明治四	一八七二	三二	工部大輔となる 条約改正のための岩倉具視特命遣外使節団の副使として欧米を歴訪 条約改正全権委任請求のため大久保利通らと一時帰国その後再度渡米する

年号	西暦	年齢	事項
明治六	一八七三	三三	岩倉使節団帰国。木戸、大久保らと征韓論問題を議論 参謀兼工部卿になる
八	一八七五	三五	井上馨と図り、木戸、大久保、板垣退助の会合を斡旋する（大阪会議） 法制局長官になる
九	一八七六	三六	三女朝子（後の西源四郎夫人）誕生
〇	一八七七	三七	勲一等旭日大綬章を受章する
一	一八七八	三八	内務卿になる
二	一八七九	三九	井上馨の兄の四男勇吉（博邦）を養子にする
三	一八八〇	四〇	岩倉具視右大臣に元老院の憲法草案中止を進言する 大隈重信とともに農商務省設置を建議する
十四	一八八一	四一	立憲体制に関する意見書を提出。大隈邸で福沢諭吉らと新聞発行計画を協議する 熱海で大隈・井上馨と国会開設問題などを協議する
一五	一八八二	四二	大隈の国会開設意見に反対し岩倉右大臣らに辞意を告げる 岩倉右大臣に国会開設の時期を明治二三年とする旨の勅語宣布の必要性を説く
一六	一八八三	四三	憲法制度調査のため欧州へ留学する
一七	一八八四	四四	欧州から帰国する
一八	一八八五	四五	宮内省制度取調局長となる 伯爵を授かる 特派員全権大使として清国に赴き天津条約に調印する 初代内閣総理大臣となる（第一次内閣―二一年まで）

年 号	西 曆	年 齡	事 項
明治一九 〇〇 二一	一八八六 一八八七 一八八八	四六 四七 四八	ドイツ皇帝より赤鷲大綬章を受章 神奈川県夏島の別荘で憲法草案を起草 憲法草案を脱稿、天皇に提出する 枢密院議長になる 憲法発布式典に参列する 眞一誕生　貴族院議員に互選 貴族院議長になる 再び枢密院議長となる 第二次伊藤内閣を組閣する（二九年まで） 日英通商航海条約締結 清国に対し宣戦の詔勅煥発を明治天皇に上奏する 全権として日清講和条約（下関条約）を結ぶ 台湾事務局総裁をなる 大勲位菊花大綬章を受章、侯爵となる 父十蔵、八一歳で死去 大磯町西小磯に滄浪閣が完成する イギリス女王即位六〇年祝賀参列のため、有栖川宮威仁親王の随行として イギリスを訪問する 第三次伊藤内閣を組閣 元老会議で新党組織を提議し山縣有朋らと激論する。内閣総理大臣の辞表 を上奏
二二 二三	一八八九 一八九〇	四九 五〇	
二四 二五	一八九一 一八九二	五一 五二	
二七	一八九四	五四	
二八	一九九五	五五	
二九	一九九六	五六	
三〇	一九九七	五七	
三一	一九九八	五八	

年号	西暦	年齢	事 項
明治三三	一九〇〇	六〇	憲政党幹部より党首就任の要請を受けるが辞退。新党への協力を求める 立憲政友会を結成、初代総裁となる 第四次伊藤内閣を組閣（三四年まで）
〃 三四	一九〇一	六一	米国エール大学より名誉博士号を贈られる
〃 三六	一九〇三	六三	立憲政友会総裁を辞し、枢密院議長となる 母琴子、八五歳で死去
〃 三八	一九〇五	六五	第二次日韓協約を結ぶ 初代韓国統監になる
〃 四〇	一九〇七	六七	ハーグ万国平和会議への密使派遣で、韓国高宗皇帝を退位させる（ハーグ事件） 公爵を授かる
〃 四二	一九〇九	六九	韓国統監を辞して、枢密院議長となる 十月二六日満州視察と日露関係調整の途次、ハルビン駅頭で安重根に狙撃され死去
大正一〇	一九二一		十一月一日、軍艦秋津島により遺骸が横須賀港に到着。四日、日比谷公園で国葬を行い、東京府荏原郡大井村（現・東京都品川区西大井）に埋葬される。従二位に叙せられる。二六日、大磯町の発起により大磯町北本町の大運寺において追悼会が開催される。
〃 一二	一九二二		伊藤家が大磯から東京へ転居する。滄浪閣が韓国李王家（李垠）に譲渡される
〃 一三	一九二四		関東大震災により滄浪閣が倒壊する 梅子夫人、七七歳で死去

年 号	西 暦	年 齢	事 項
大正一五 昭和 元	一九二六		大磯町西小磯の白岩神社に藤公碑が建てられる 滄浪閣旧材を利用しながら李王家を再建。第二次大戦終了まで大磯別邸として使用する
昭和一一 " 一六	一九三六 一九四一		大磯町立大磯小学校にて藤公祭が始まる 旧滄浪閣に「伊藤公滄浪閣之舊蹟碑」が建立される

「光市伊藤公記念館」「萩市教育委員会」制作パンフレット及び、「大磯町郷土資料館」制作冊子より

【参考文献】

「伊藤博文 近代日本を創った男」

伊藤之雄 著 講談社

「伊藤博文公の御位碑とご先祖のお墓が顕現！」

柴田眼治 著 蒙談第三十二号 蒙談会

「伊藤博文 知の政治家」

瀧井一博 著 中公新書

「没後百年記念 伊藤博文とその時代」

萩博物館

「伊藤博文と韓国統合」

伊藤之雄 李盛煥 編著 ミネルヴァ書房

「伊藤博文没後百年記念 滄浪閣の時代」

大磯町郷土資料館

「明治天皇」

伊藤之雄 編著 ミネルヴァ書房